

Title	<論文>「高慢と偏見」におけるトランプと恋愛ゲーム
Author(s)	川北, 天華
Citation	文芸表象論集 = Literary Arts and Representation (2017), 5: 1-11
Issue Date	2017-12-31
URL	https://doi.org/10.14989/LAR_5_1
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

『高慢と偏見』におけるトランプと恋愛ゲーム

川北天華

はじめに

Jane Austen の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)には、登場人物たちがトランプのゲームをする様子がしばしば描かれる。登場するゲームは実に種類豊富で、その生き生きとした筆致からは、日常生活の機微を仔細に観察し、小説に巧みに生かす Austen の手腕がうかがわれる。

しかし、『高慢と偏見』におけるトランプそれ自体を中心に扱った批評は少ない。たしかに、登場回数こそ多いが、ゲームの勝敗に主眼が置かれることはなく、大きな事件の契機になるわけでもないで、それほど関心が払われないのも不思議はない。登場するトランプゲームの中には現存しないものも含まれるため、現代の読者にはルールがよく分からない場合もある。

しかしながら、Austen の作品には、劇的な出来事が少ない代わりに、平凡な日常生活の中に登場人物の性格や感情が細かく書き込まれるという特徴がある。したがって、一見些末と思われる要素にも着眼する意義があると考えられる。また『高慢と偏見』の主題は言うまでもなく恋愛であるが、意中の相手や恋のライバルとの駆け引きの様子を一種のゲームと見なすならば、登場人物たちの恋愛と彼らが行うトランプゲームとの間に、何らかの相関を探ることができるのではないだろうか。

本稿では、まず作中に登場する種々のトランプゲームについて概観し、Austen が登場人物たちの性格描写のためにトランプを巧みに利用していることを明らかにする。また、トランプの場を恋愛ゲームと読み替え、ゲームへの参加態度や勝敗の考え方を通してプレイヤーの恋愛観を読み取る。最後に Elizabeth と Darcy のトランプへの関わり方に注目し、恋愛ゲームにおける二人の態度の変化について考察したい。

1. 各ゲームについて

1.1 *Vingt-un* と *Commerce*

最初にトランプへの言及が見られるのは Chapter 6 で、Elizabeth と Charlotte が Jane と Bingley との関係について会話しているシーンである。Jane と Bingley は四度ほど顔を合わせており、お互い憎からず想っているらしいが、Elizabeth は「四回会ったぐらいでは互いの性格なんて分からない(This is not quite enough to make her understand his character.)」(23)と述べる。すると Charlotte は「四晩も共に過ごせば十分多くのことが分かる([F]our evenings may do a great deal.)」(23)と答える。これに対し Elizabeth は次のように返す。

“Yes; these four evenings have enabled them to ascertain that they both like Vingt-un better than Commerce; but with respect to any other leading characteristic, I do not imagine that much has been unfolded.” (23 以下全て下線部は筆者による)

残念ながら Vingt-un も Commerce も現代には残っていない古いゲームなので、類似したもので比較してみよう。Vingt-un は今でいうところの Blackjack、Commerce は今でいうところの Brag のようなゲームである¹⁾。前者はディーラーとの一対一の対戦で、現在でもカジノでよく行われていることから推察されるように、ギャンブルの要素が強い。一方後者は、四人から八人程度で行うゲームで、自分の持ち札を実際より良く見せかける心理戦である。

Schneider は、プレイヤーに比較的高いレベルの技術が求められる Commerce に比べ、Vingt-un は「技術(skill)」よりも「運(chance)」の要素が勝ると述べ、Jane と Bingley が Vingt-un を好むことは、二人の「臆病さ(timidity)」を示すと分析している。その臆病さのために、Jane は自分の気持ちを相手に上手く伝えられず、Bingley は姉妹や Darcy の意向に簡単に左右されてしまう(Schneider 10)。

Jane と Bingley に恋愛をものにする「技術」が欠けているかどうかはさておき、二人とも性格が穏やかで、人を疑うことを知らないことは確かだ。Elizabeth をして「姉さんは人の欠点を見ようとしない(You[Jane] never see a fault in anybody.)」(16)、「ビングリーさんが正直だってことを疑いはしないわ(I have not a doubt of Mr. Bingley’s sincerity.)」(94)と言わしめる二人だから、相手を騙すようなゲーム(Commerce)よりも運勝負(Vingt-un)を好むのも納得できる。短い描写ながら、Jane と Bingley の「お人よし」という共通点を早い段階で印象付けているといえるだろう。

1.2 Loo

次にトランプが登場するのは Chapter 8 で Jane と Elizabeth 姉妹が Netherfield に厄介になるエピソードである。Loo は大勢で参加できる round game であるにもかかわらず、Elizabeth は誘いを断る。この場面については次章で詳しく述べる。

1.3 Piquet

Chapter 10 の冒頭、Netherfield で Bingley と Mr.Hurst は二人用のゲームである Piquet に興じており、Mrs. Hurst はその様子を横で見ている(46)。

Brumit はこれを、Mrs. Hurst が締め出しを食らっていると解し、“[a]n exclusion that reflects the status of the Hursts’ marriage: Mr.Hurst lives for food, drink, and cards, but not for his wife” (Brumit online)と述べているが、Austen が Hurst 夫妻の不和を強調するためにこのゲームを使ったと考えるのは行き過ぎのように感じる。配偶者に大して興

味がないのは Mrs. Hurst も同じだからだ。

むしろこの場面では、Darcy がトランプに加わらず、Miss Bingley も Darcy のそばにいたので、残りのメンバーは仕方なく少人数用のゲームを採用していると考えた方が自然だろう。Darcy がここでゲームに参加しないことについても、後ほど述べる。

1.4 Quadrille、Cassino、Whist

誰の目にも明らかなことだが、Collins はトランプゲーム向きの人間ではない。

She [Lady Catherine] had also asked him [Collins] twice to dine at Rosings, and had sent for him only the Saturday before, to make up her pool of quadrille in the evening.
(65)

「Lady Catherine に Quadrille に招いていただいた」と Collins は得意満面だが、実は Quadrille はプレイ人数が四人と決まっており(赤桐 86)、三人以下では出来ないゲームである。つまり Collins は人数合わせのために招かれたにすぎないのだ。だからあくまで「Quadrille の仲間を集めるため(to make up her pool of quadrille)」なのであり、Lady Catherine には Mr. Collins を特別に引き立てる意図はないと思われる。

Lady Catherine は Quadrille を好むようで、Chapter 29 でも客人を呼び集めて Quadrille を行っている。Quadrille が初心者には難しいゲームである一方、当時すでに時代遅れのゲームでもあったことを考えると(Brumit online)、ことあるごとに Quadrille にいそしみ、プレイ中もはっきりなしに「他の三人のミスを指摘したり自分のエピソードを語ったりする(stating the mistakes of the three others, or relating some anecdote of herself)」(163)Lady Catherine の描写には、由緒ある貴族階級のレディとしての権力を誇示しようとする彼女の虚栄心が現れているといえる。

その Lady Catherine の娘 Miss De Bourgh は、同じ場で Cassino という別のゲームをしており、Elizabeth はこちらのゲームに参加している。Cassino は Quadrille と違い、必ずしもプレイヤーが四人とは決まっていないにもかかわらず、ここで Miss De Bourgh が Charlotte と Elizabeth、Mrs. Jenkinson を集めて四人で Cassino をすることについては、Lady Catherine の模倣だとの指摘がある(Brumit online)。

話を Collins に戻すと、彼は Meryton のパーティで Whist の席に招かれ、経験もないのに意気揚々と参加する。Whist は分類としては Quadrille と同じ trick taking game であり、イギリスで好まれる伝統的なゲームである。しかし、赤桐によれば Whist は「ルールは単純」だが「プレイは難しいゲーム」であり、「ある程度のトリックテイキングゲームの経験がないと、プレイの結果が技術によるものか運によるものかわからず達成感を得にくい」と、初心者には決してお勧めできないという(赤桐

44)。したがって、ルールを知っている読者ならば、この後 Collins は大敗を喫するだろうということが予想でき、また実際そうなる([H]e had lost every point; (81))。皮肉なことに、Whist もまた四人用のゲームである。つまり Collins はここでも、単に人数合わせのために招かれたのだろう。

1.5 Lottery Tickets

Meryton で Collins が Whist で大負けする一方、Elizabeth、Lydia、そして Wickham は Lottery Tickets というゲームに加わる。これは現金ではなく景品を賭けた、純粋に運だけで勝負が決まる簡単なゲームで(Brumit online)、だからこそ Wickham はゲームの最中にもかかわらず Elizabeth に話しかける余裕があるのである(75-76)。

このゲームが計算や駆け引きを必要としない単純な「くじ引き」であることから、Lottery Ticket をとりわけ好む(extremely fond of lottery tickets (75))Lydia の知性のなさがあらわになる。元々おしゃべりな Lydia だが、Lottery Ticket 中は「次の目に賭けたり当たりて歓声を上げたりで忙しく(too eager in making bets and exclaiming after prizes)」(75)、パーティからの帰途でも「Lottery Ticket についてひっきりなしに喋る(talked incessantly of lottery tickets)」(82)など、その落ち着きのなさが助長されている。Austen は Lottery Ticket を低俗で騒がしいゲームと捉えており、Lydia の短所を強調するためにこのゲームを利用していると考えてよいだろう。しかし同時に、Elizabeth もまた Lottery Ticket に参加していたということも指摘しておかなければならない。知性のある Elizabeth ならば、このゲームこそ辞退してもよさそうだが、彼女がそうした理由については次章で考察する。

以上のように、『高慢と偏見』では登場人物の性格描写においてトランプが巧妙に利用されている。Austen は登場人物のゲームの好みや戦い方を描くことで、単なる頭の良し悪しに限らず、その人の考え方や周りの人に対する態度までも見事に書き分けているといえる。

以降ではさらに一步踏み込み、登場人物の恋愛観や結婚観という視点から、本作におけるトランプの果たす役割を考えてみたい。

2. トランプと恋愛ゲーム

2.1 Collins と Charlotte の場合

Meryton で Whist に大敗し、恥を晒してしまう Collins であるが、掛け金を失ったことを Mrs. Philips に心配されると、自分にとってははした金であるからさして残念ではない、と負け惜しみを言う。その後の彼の発言が興味深い。

“I know very well, madam,” said he, “that when persons sit down to a card table, they must take their chance of these things—and happily I am not in such circumstances as

to make five shillings any object.” (81)

Collins がトランプについて述べた「トランプのテーブルにつく以上は、勝負は時の運と存じております」という言葉は、後に彼の妻となる Charlotte がかつて言った「結婚して幸せになれるかどうかなんて、まったくの運だもの(Happiness in marriage is entirely a matter of chance.)」(24)という言葉と呼応している。つまり、トランプを実際の彼らの恋愛・結婚と重ね合わせるとき、Collins と Charlotte の考え方は一致しており、これは二人の結婚の伏線となっているのではないだろうか。

また Collins が Phillips 夫妻に招かれた Whist で「総負け(lost every point)」(81)してしまうことは、彼が Mrs. Phillips の姪である Bennet 家の娘たちを結局一人ものにもできないこと(最初に狙いをつけていた Jane には決まった相手があり、次女 Elizabeth には求婚を断られてしまう)をも暗示していると考えられる。結果として、たまたま売れ残っていた隣人の Charlotte と結婚をするという成り行きは、まさに“matter of chance”である。

以上のことから分かるのは、この作品の中でトランプゲームは登場人物たちが行っている恋愛の比喩となっているということだ。つまり彼らは、いわば、限りある持ち札の中で自分にふさわしい配偶者を見つける恋愛ゲームをしているのである。そしてゲームが繰り返されるカードテーブルは、現実の恋愛市場と読み替えることもできる。

これを前提として、主人公 Elizabeth についてもトランプに関わる場面を検討し、トランプへの参加の仕方から、彼女の恋愛ゲームでの立ち位置について検討したい。

2.2 Elizabeth と Darcy の場合

Elizabeth が風邪を引いた Jane と共に Netherfield に滞在している間、人々は何度かトランプを行う。最初の晩に行われるゲームは Loo である。前述のように Loo は大人数で遊べるゲームで、何人でも参加できる。次に述べられているとおり、Elizabeth もこのゲームに招かれるが、掛け金が高いことを危惧した彼女はこれを断り、一人で本を読むことを選択した。

On entering the drawing-room she [Elizabeth] found the whole party at loo, and was immediately invited to join them; but suspecting them to be playing high she declined it, and making her sister the excuse, said she would amuse herself for the short time she could stay below with a book. (37)

Elizabeth のこの態度について、Mr. Hurst は「変わっている(singular)」(37)と言って驚くが、トランプを恋愛ゲームになぞらえるならば、Elizabeth が参戦したがないの

は当然のことである。この場には彼女の恋愛対象になりえる男性は一人もいないからだ(Looに参加している男性のうち、Mr. Hurstは既婚者で、Bingleyは姉の想い人、そして最後の一人DarcyをElizabethは嫌悪している)。つまり、この場で「トランプ=恋愛ゲーム」に参戦しても彼女にメリットはない。ゆえに、彼女はあくまでプレイヤーではなく観戦者でありたがる ([S]he drew near the card-table, [...]to observe the game. (38)) のである。彼女がDarcyから寄せられる視線に気づかないのは、自分は勝負の外にいたいと思っており、誰かの恋愛対象になっているという意識がないためである。一方、Miss Bingleyが「彼女はトランプみたいな遊びを軽蔑してるのよ([Miss Eliza Bennet] despises cards.)」(37)とあてこすり、Elizabethをゲームに引き込もうとしないのは、Darcyを巡る恋愛ゲームにおいてライバルを増やさないためとも考えられる²⁾。

Darcyはと言うと、彼はこれ以降Netherfieldでトランプをしなくなる。同じ章で彼が「Elizabethに品のない家族がいなければ危ないところだった([W]ere it not for the inferiority of her connections, he should be in some danger.)」(51)と自覚する描写があることを考えると、彼のトランプへの不参加は、(あまりにElizabethに惹かれすぎると不相応な結婚をする羽目になるとの自己防衛から)彼もまたこの恋愛ゲームを降りようとしていることの表れともいえる。

ElizabethとDarcyが共にトランプをしたがらない性質を持つことは既に指摘されている。たとえばDuckworthは、Austenはトランプを否定的に捉えており、CollinsやLydia、Wickhamなどがトランプを好む一方、ElizabethやDarcyがトランプのプレイヤーとして強調されることはないと述べている(Duckworth 283-84)。

たしかに、ElizabethやDarcyは、LydiaやCollinsのようにゲームに夢中になって大騒ぎしたり結果に一喜一憂したりすることはない。しかし、だからといってトランプを避けているとは必ずしも言えない。Netherfieldの場面以降も何度か、二人がトランプをする描写があり、まったくの無関心とは思えないのである。重要なのはむしろ、二人が恋愛への意欲に応じてトランプへの態度を変えている点であろう。

たとえば、ElizabethはMerytonで開かれたパーティでトランプに参加している。この時点ではElizabethの関心はDarcyではなくWickhamに向いていることに注意したい。

Mr. Wickham did not play at whist, and with ready delight was he received at the other table between Elizabeth and Lydia. (75)

カードテーブルが持ち出されると、WickhamはElizabethとLydiaのいるLottery Ticketsの席に招き入れられる。Netherfieldでの試合放棄とは反対に、ここでElizabethはしっかりとテーブルにつくばかりか、意中のWickhamをゲームに引き入れること

までしている。Elizabeth がこのときいかに Wickham との恋愛に乗り気だったかがよく分かる描写である。

また、ここで Wickham が Elizabeth と Lydia の間に腰を下ろすのも示唆深い。このときの Elizabeth には知る由もないが、この後 Wickham を巡るゲームは Elizabeth と Lydia との間で戦われることになるのである。前述のように、Lottery Tickets というゲームは決して好意的な描き方をされていない。Elizabeth がここで Lydia と共にこのゲームに参加することは、Elizabeth が Wickham の弁舌に惑わされて冷静な判断力を失い、Lydia と同じレベルまで下がっていることを意味する。

作品後半になるとトランプの描写は少なくなるが、Darcy の尽力によって Wickham と Lydia が正式に結婚した後、Longbourne でパーティが行われる次の場面で、カードテーブルが持ち出されている。

When the tea-things were removed, and the card tables placed, the ladies all rose, and Elizabeth was then hoping to be soon joined by him[Darcy], when all her views were overthrown, by seeing him fall a victim to her mother's rapacity for whist players, and in a few moments after seated with the rest of the party. (323)

今や Darcy に恩義を感じている Elizabeth は、彼がトランプに加わってくれることを期待するが、Whist のメンバー集めに必死だった Mrs. Bennet が強引に Darcy を別のテーブルに入れてしまう³⁾。思いがけず母の手で Darcy と引き離されてしまった Elizabeth がすっかり落胆する様子が、引き続き描かれる。

She[Elizabeth] now lost every expectation of pleasure. They were confined for the evening at different tables, and she had nothing to hope, but that his eyes were so often turned towards her side of the room, as to make him play as unsuccessfully as herself. (323)

Netherfield では Darcy と共にトランプをすることを辞退した Elizabeth だが、ここでは Darcy と別のテーブルにつくことを非常に残念に思っている。Elizabeth は Darcy と同じテーブルで戦いたいと考えていたのである。つまり、彼女はこの時点で、Darcy との恋愛ゲームにプレイヤーとして参加し、Darcy を勝ち取ることを望んでいたといえる。

このように、トランプに対する態度から、Elizabeth の Darcy への想いの変化を読み取ることができる。Darcy の二度目の求婚までには、まだあと四章分待たねばならないが、この時点で彼女は既に Darcy との結婚への想いを固めているといえるだろう。

おわりに

本稿では『高慢と偏見』に登場するトランプのゲームを詳しく分析し、一見単なる小道具と思われがちなゲームの一つ一つにも、登場人物の性格描写が行き渡っていることを示した。また同時に、トランプは登場人物たちの恋愛の比喩として機能しており、トランプへの参加の仕方を丁寧に見ていけば、登場人物の恋愛観や、今後の展開の伏線をも読み取れることを指摘した。

今回注目したのはトランプという小さな要素ではあるが、だからこそ、平凡な日常生活の中に丁寧に感情を描き出す Austen 文学の特徴がよく現れているといえる。同時に、当時の人々にとってはトランプが日常の一部で、それだけ親しみ深い存在だったのだろうということも想像できる。親しい者同士が同じテーブルを囲み、相手の顔色を窺いつつ、ときには心理的駆け引きを繰り返しながら楽しむトランプは、恋愛のみならず人間関係一般において潤滑剤のような役割を果たしていたのではないだろうか。もっぱら「画面」と見つめ合うばかりの現代のゲームとは、意味合いが大きく異なっていたに違いない。

註

- 1) Brumit は「Commerce は Poker に近いゲーム」(Brumit online)と述べているが、Poker は 19 世紀前半にアメリカのニューオリンズで生まれたゲームである。そのため、Poker よりはむしろその起源となったとされる 18 世紀後半成立のイギリスのゲーム Brag(赤桐 549, 570)の方が Commerce に近いと考え、ここでは Brag の項を参考にした。Brag とは「自慢」の意で、持ち札を実際より良く見せることを言う。
- 2) Miss Bingley は Darcy の好意を引こうと必死なので、もちろん彼とのトランプにも意欲的である。逆に Darcy が参加しないならトランプをする意味もないので、Darcy が手紙を書いているときに兄や義兄がトランプをしていても、そちらには近づかない(46)。また後日 Mr. Hurst がカードテーブルを持ち出そうとしたときも、Darcy がトランプをやらないと聞くや、「誰もトランプはやりたくないみたい([N]o one intended to play)」(53)とすげなく断ってしまう。
- 3) 繰り返し述べるとおり、Whist は四人用のゲームで、そうでもなければ Mrs. Bennet が嫌っている Darcy を強引に招き入れるはずはない。Lady Catherine に招かれる Collins の例と同じく、ここでトランプは本来ありそうもない組み合わせを可能にさせる道具として機能している。

参考文献

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*, edited by Vivien Jones, Penguin, 2003.

Brumit, M. W. “[T]hey both like Vingt-un better than Commerce”: Characterization and Card Games in *Pride and Prejudice*.” *Persuasions On-line*, Jane Austen Society of North America. Accessed 29 Jul. 2016.

<http://www.jasna.org/persuasions/on-line/vol34no1/brumit.html>.

Duckworth, Alistair M. “Spillikins, paper ships, riddles, conundrums, and cards’: Games in Jane Austen’s life and fiction.” *Jane Austen: Bicentenary Essays*, edited by John Halperin, Cambridge UP, 1975. pp. 279-97.

Schneider, Matthew. “Card-playing and the Marriage Gamble in *Pride and Prejudice*.” *The Dalhousie Review*, Vol.73, No.1, 1993, pp.5-17. Accessed 30 Oct. 2017.

<http://hdl.handle.net/10222/61254>.

赤桐裕二 『カードゲーム大全』 スモール出版、2014年。

The Games of Cards and Love in *Pride and Prejudice*

KAWAKITA Yuki

Summary: Many card games are described in Jane Austen's *Pride and Prejudice* (1813). This paper focuses on those card games and reveals that Austen uses the games to explain the players' personalities. Furthermore, we interpret the card games as a metaphor for games of love between the players. According to this hypothesis, it can be said that Elizabeth changes her attitude toward card games based on her eagerness for love.